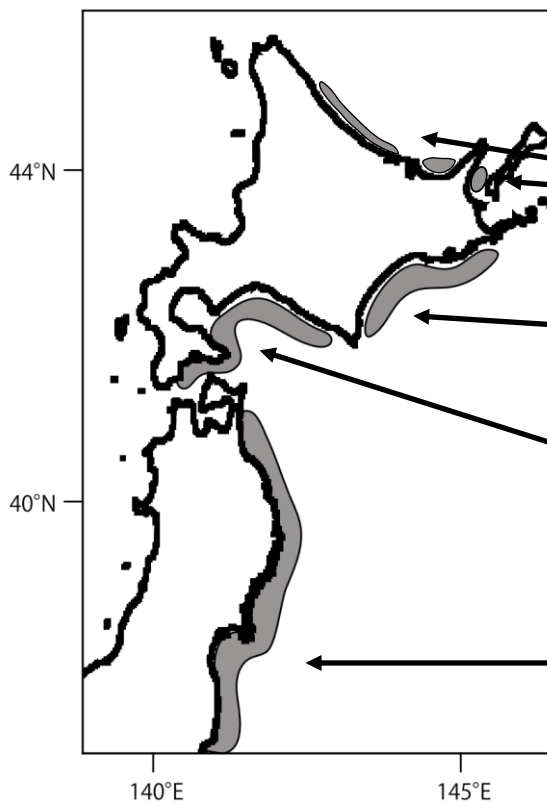




2023年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し（2023年10月～12月）のポイント



スルメイカの来遊量は、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回り、常磐～三陸海域では前年並と予測される。

根室海峡～オホーツク海：
来遊量は前年を下回る。
魚体は見通しを示せない。

道東太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は見通しを示せない。

津軽海峡～道南太平洋海域：
来遊量は前年を下回る。
魚体は前年より小さい。

常磐～三陸海域：
来遊量は前年並。
魚体は前年より小さい。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：企画調整部門（横浜） 上原

浮魚資源部（横浜） 大島、松井

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

2023年度 第2回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2023年10月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海、津軽海峡～道南太平洋海域、常磐～三陸海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網、刺し網

対象魚群：主に冬季発生系群（2023年級群）

1. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間中の漁場形成は散発的となる。
- (3) 魚体：見通しを示せない。

2. 根室海峡～オホーツク海（いか釣り、底びき網、定置網、刺し網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は前年と同様に12月までとなる。
- (3) 魚体：見通しを示せない。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。
- (3) 魚体：前年より小さい。

4. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場が形成される。
- (3) 魚体：前年より小さい。

I 予報の説明

2023年8月～9月に実施した漁場一斉調査とイカ類南下期資源調査¹⁾の結果(図1～3;以降、いか釣り調査と総称する)、および8月(一部9月を含む)の漁況経過を主要な情報として太平洋における10月～12月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域、津軽海峡～道南太平洋海域では前年を下回り、常磐～三陸海域では前年並と予測される。

1. 道東太平洋海域(いか釣り、底びき網)

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。道東周辺海域(42°N以北、143°E以东)におけるいか釣り調査の平均CPUE(いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数)は漁獲が無かった前年を上回ったものの低い水準であった(図1、2)。道東主要港では8月に水揚げがなく、前年の漁獲量を下回った(表1)。以上のことから、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回り、漁場形成は散発的になると予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における本年8月～9月上旬の漁獲がほとんど無いため、前年との比較予測はできない。

2. 根室海峡～オホーツク海域(いか釣り、底びき網、定置網、刺し網)

この海域の漁獲対象魚群は、太平洋沖合を北上する群が主体と考えられる。釧路以东(144°40'E以东)におけるいか釣り調査では前年同様に漁獲が無かった(図1、2)。北方四島周辺の太平洋側の海域における8月上旬以降の平均海表面水温²⁾は前年より高く、10月までの予測水温(図4)³⁾は前年並のため、スルメイカが太平洋からオホーツク海へ前年より回遊しやすい環境であると考えられるものの、釧路～羅臼周辺海域における9月上旬までの漁獲量は前年を大きく下回ったまま推移している(表1)。以上のことから、根室海峡～オホーツク海域への来遊量は前年を下回ると予測される。オホーツク海沿岸の10月の予測水温は前年並であるため(図4)、漁期は前年と同様の12月までと予測される。

魚体サイズについては、当該海域周辺における本年8月～9月上旬の漁獲がほとんど無いため前年との比較予測はできない。

3. 津軽海峡～道南太平洋海域(いか釣り、定置網)

この海域の漁獲対象魚群は、津軽海峡～道南太平洋海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられる。津軽海峡～道南太平洋周辺海域(41°N以北、143°E以西)におけるいか釣り調査の平均CPUEは前年を下回った(図1、2)。函館港と大畑港での8月の小型いか釣り船CPUE(1日1隻当たり水揚げ量)は前年を下回った(表1)。9月上旬の小型いか釣り船CPUEも、函館港と大畑港どちらも前年を下回った^{4、5)}。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域における群の分布量は前年を下回ると考えられる。また、前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。したがって、津軽海峡～道南太平洋周辺海域への来遊量は前年を下回ると予測される。

魚体サイズについては、いか釣り調査の結果(図3)から前年より小型の個体が主体になると考えられる。

4. 常磐～三陸海域(いか釣り、底びき網、定置網、まき網)

この海域の漁獲対象魚群は、常磐～三陸海域に分布する群と道東太平洋海域から南下する群が主体と考えられ

る。三陸周辺海域（41° N以南、143° E以西）におけるいか釣り調査では海域全体で1尾しか漁獲されず、漁獲の無かった前年同様に極めて低い水準であった（図1、2）。青森県、岩手県、宮城県の主要港での8月の小型いか釣り船 CPUE は前年を下回ったものの、青森県、岩手県、宮城県の主要港における9月上中旬の底びき網による漁獲量^{6, 7, 8)}は前年を大きく上回った（表1）。以上のことから、常磐～三陸海域における群の分布量は前年並と考えられる。前述の通り、道東太平洋海域への来遊量は前年を下回ると予測されている。したがって、常磐～三陸周辺海域への来遊量は前年並と予測される。

魚体サイズについては、当該海域において最も水揚量の多い青森県における8月、9月上旬の水揚物⁴⁾が前年より小さかったことから（図5）、魚体サイズは前年より小型の個体が主体になると考えられる。

- 1) 北海道立総合研究機構釧路水産試験場が独自に実施。
- 2) 気象庁の札幌管区気象台が公表している日別海域平均海面水温
(<https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyoo/series/engan/engan.html>)
- 3) 国立研究開発法人水産研究・教育機構により開発され、2022年3月より運用を開始した海況予測システム (FRA-ROMSII) による予測水温 (<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/index.html>)
- 4) 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計。
- 5) ウオダス漁海況速報 (https://www.aomori-itc.or.jp/soshiki/suisan_sougou/output/uodas/uodas.html) による漁況データを基に集計。
- 6) 八戸市水産事務所 (https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/suisanjimusho/1_1/1635.html) による水揚げ概況を基に集計。
- 7) 岩手大漁ナビ (<https://www.suigi.pref.iwate.jp/>) による市況データを基に集計。
- 8) みやぎ水産 NAVI (https://suisan-navi.pref.miyagi.jp/mizuage_top) による水揚げデータを基に集計。

II 調査結果

8月～9月に実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均 CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.09尾であり、前年（0.33尾）を下回った（図1、2）。海域別に見ると、三陸周辺海域では0.03尾であり、漁獲が無かった前年を上回った。津軽海峡～道南太平洋周辺海域では0.24尾であり、前年（1.6尾）を下回った。道東周辺海域では0.1尾で、漁獲が無かった前年を上回った。

津軽海峡～道南太平洋周辺海域における漁獲物の外套背長組成の最頻値は12 cmにあり、前年（19 cm）より小さかった（図3）。道東周辺海域と三陸周辺海域における漁獲物の外套背長組成の最頻値はそれぞれ18 cmと11 cmであったが、どちらの海域も前年は漁獲が無かったため比較できない。

参考情報として、6月下～7月中下旬に三陸～道東沖合域で実施された表層トロールネットによる調査の結果を示した（図6）。本調査によるスルメイカの平均 CPUE（60分曳網あたり漁獲尾数）は1.9尾で、前年（0.2尾）を上回った。また、全調査点のうち有漁点の割合は40%であり、前年（10%）を上回った。漁獲物の外套背長組成の最頻値は8cmにあり、前年（4cm）より大きかった（図7）。本調査で採集された群れは、本予報期間に漁場へ来遊する可能性がある。

III 各海域の漁況経過

2007年～2015年の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2022年は1.3万トンであった（図8）。10月～12月に限定した累計漁獲量は、2007年以降5万～10万トンで推移していたが、2016年以降大きく減少し、2022年は0.7万トンであっ

た。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域、根室海峡～オホーツク海域に区分される。

2022年10月～12月の常磐～三陸海域における漁獲量（生鮮）は2.8千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では3.0千トン、道東太平洋海域では0.5千トン、根室海峡～オホーツク海では0.6千トンであった（図9）。また、千葉県以南の海域での漁獲量は19トンであった。2018年～2022年の平均に対する比は、常磐～三陸海域では60%、津軽海峡～道南太平洋海域では113%、道東太平洋海域では84%、根室海峡～オホーツク海では44%、千葉県以南の海域では64%であった。

2023年7月～8月の太平洋沿岸域での水揚量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は0.7千トンで、前年（1.8千トン）を下回った。そのうち、常磐～三陸海域の主要港では0.6千トンで、前年（1.3千トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港の水揚量は一部集計中だが、現状では99トンで、前年（431トン）を下回っている。道東太平洋海域の主要港では0トンで、前年（15トン）を下回った。根室海峡～オホーツク海では0トンで、前年（1トン）を下回った。千葉県以南の主要港では8トンで、前年（45トン）を下回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図8、図9を含めた漁獲量は全て推定値である。

²⁾ 水揚量は単純積み上げた数値。

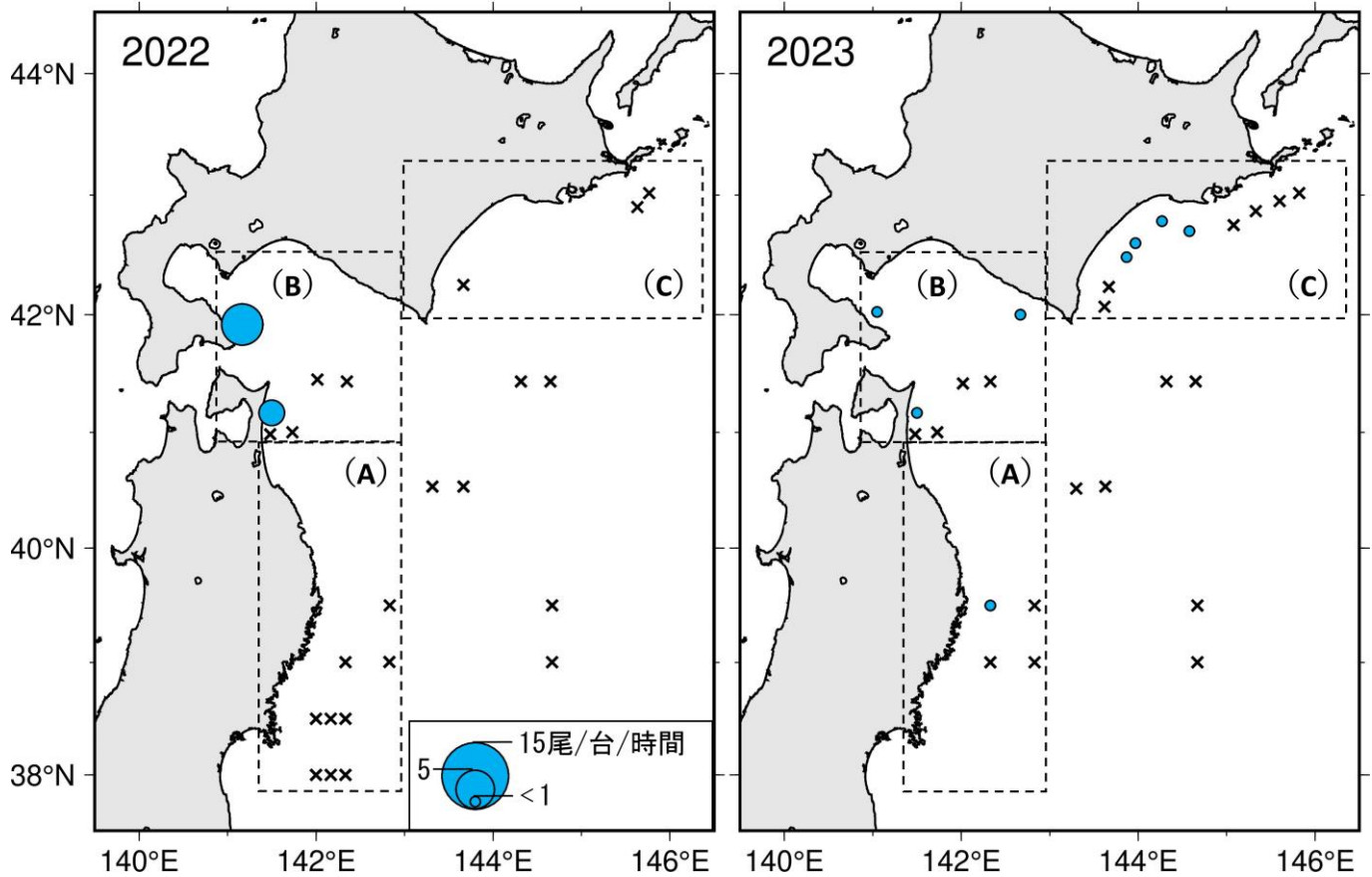


図1. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布

2022年と2023年の8月～9月のいか釣りによるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布を左図右下の凡例にしたがって示す（×は漁獲なし）。破線で囲まれた海域は（A）常磐～三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）道東太平洋海域および根室海峡～オホーツク海域における来遊量予測の根拠となった調査海域を示す

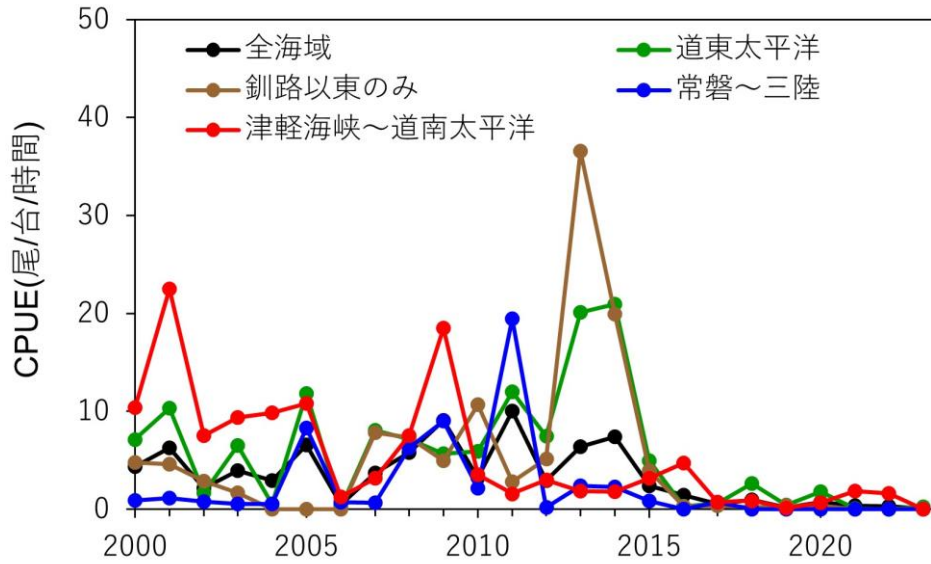


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

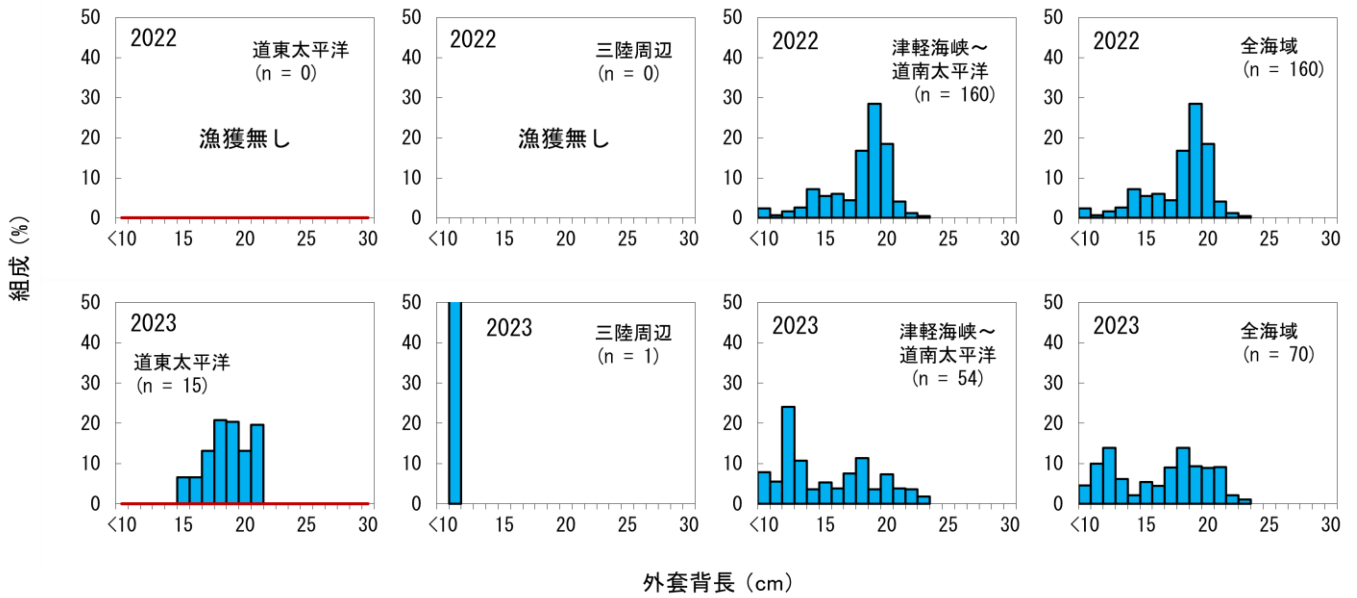


図3. 太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカ外套背長組成の結果

nは測定尾数を示し、最左図の赤線は道東太平洋海域の釧路以東のみの結果を示す

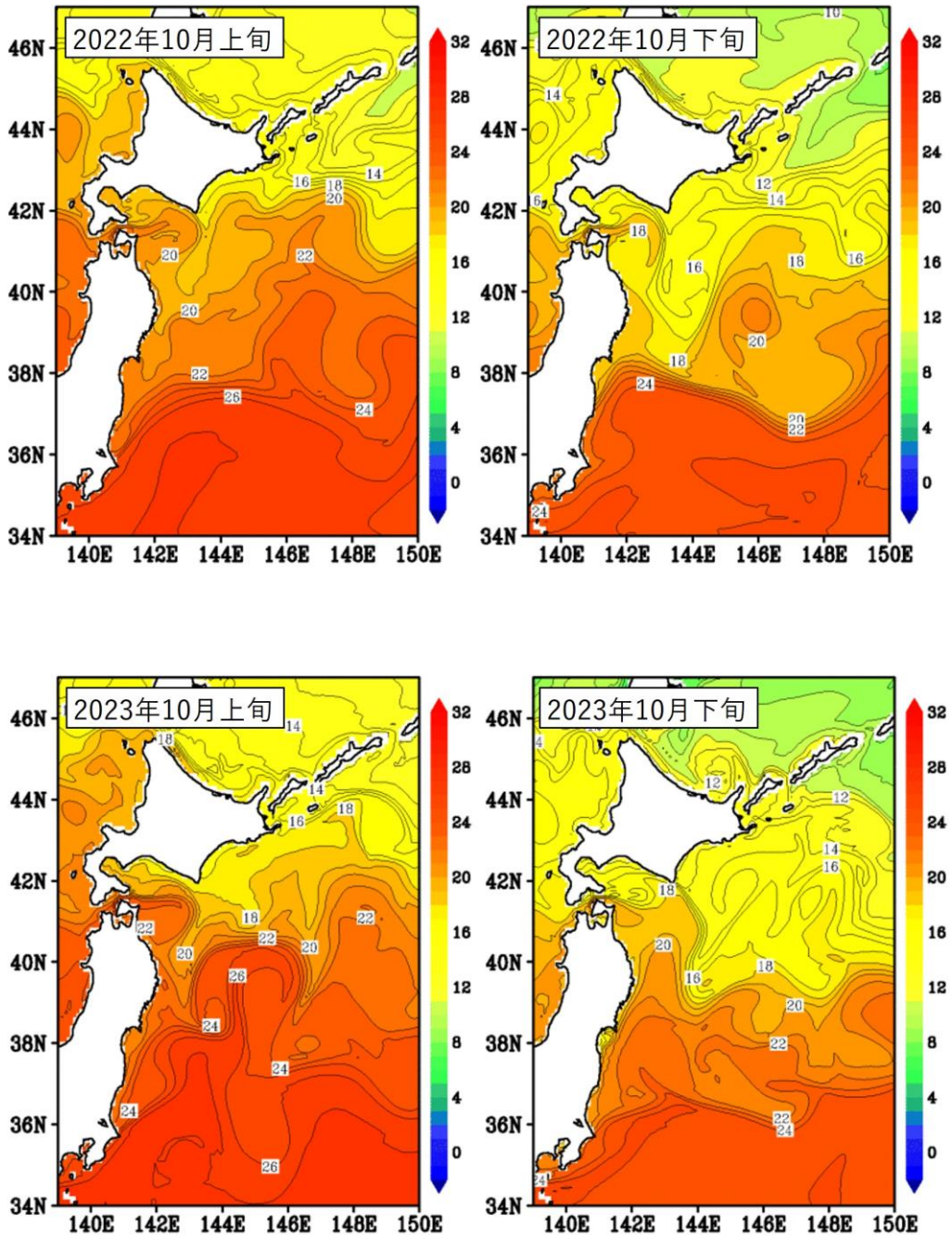


図4. 海況予測システムFRA-ROMSIIによる2022年、2023年の10月上旬と下旬の海表面水温
 2023年は予測水温であり、2023年9月27日にHPより取得した

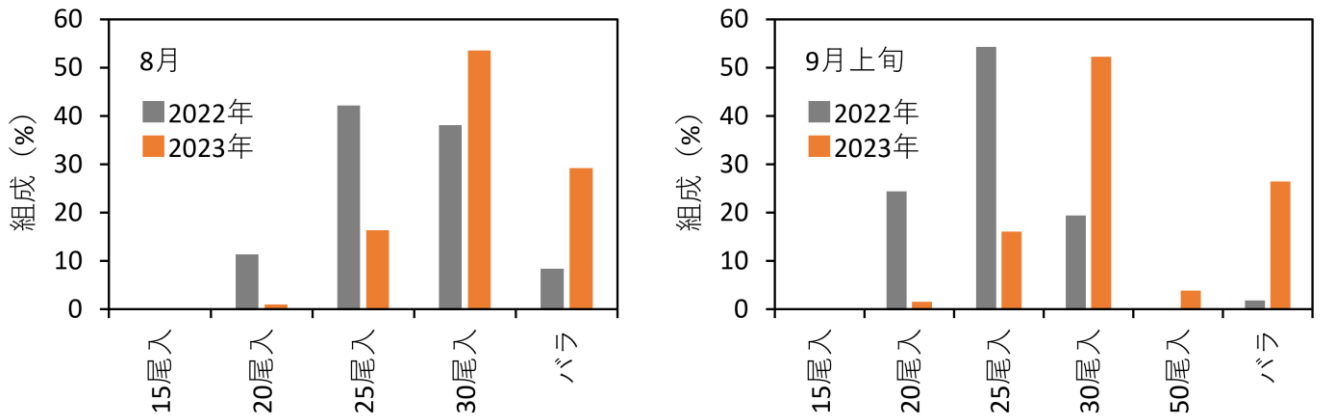


図5. 2022年、2023年の8月および9月上旬に青森県（釣り）で水揚げされたスルメイカの入尾数別水揚げ箱数の組成
 1箱当たりの重量は約6kgであり、入尾数が小さい（横軸の左側）ほど魚体サイズは大きい
 漁業情報サービスセンターによるスルメイカ漁況・市況情報を基に集計

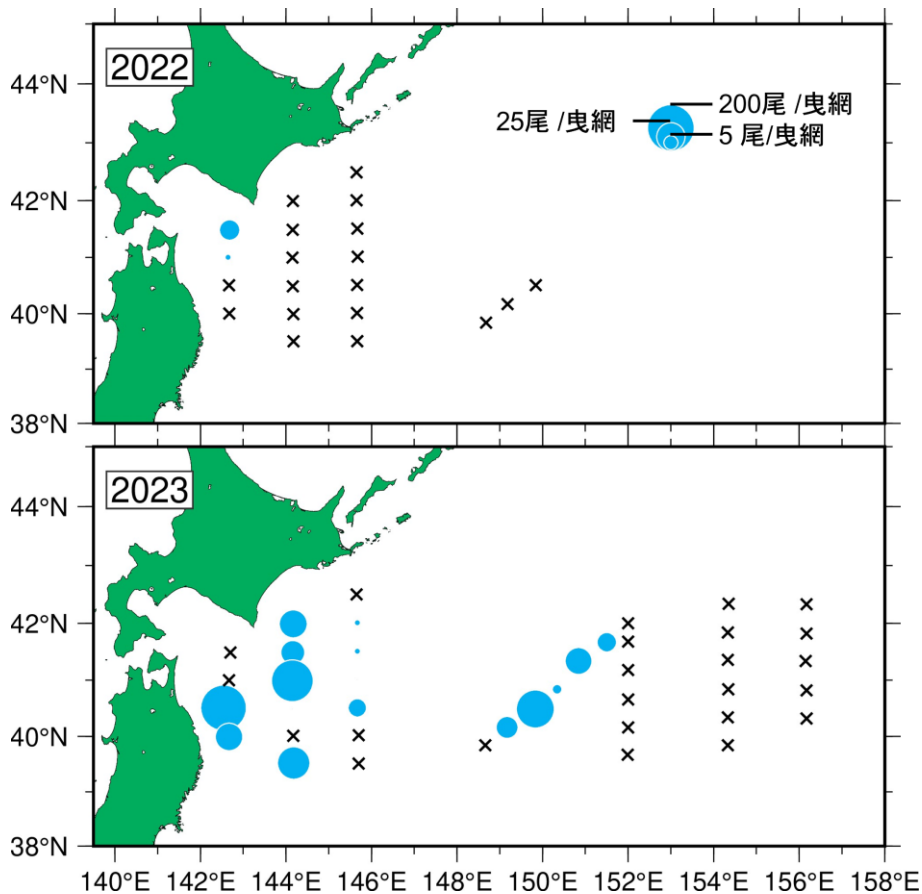


図6. 2022年、2023年6月下旬～7月中下旬の三陸～道東沖合域における表層トロールネット調査によるスルメイカのCPUE（60分曳網当たり漁獲尾数）の分布
 ×は漁獲が無かった点を示す

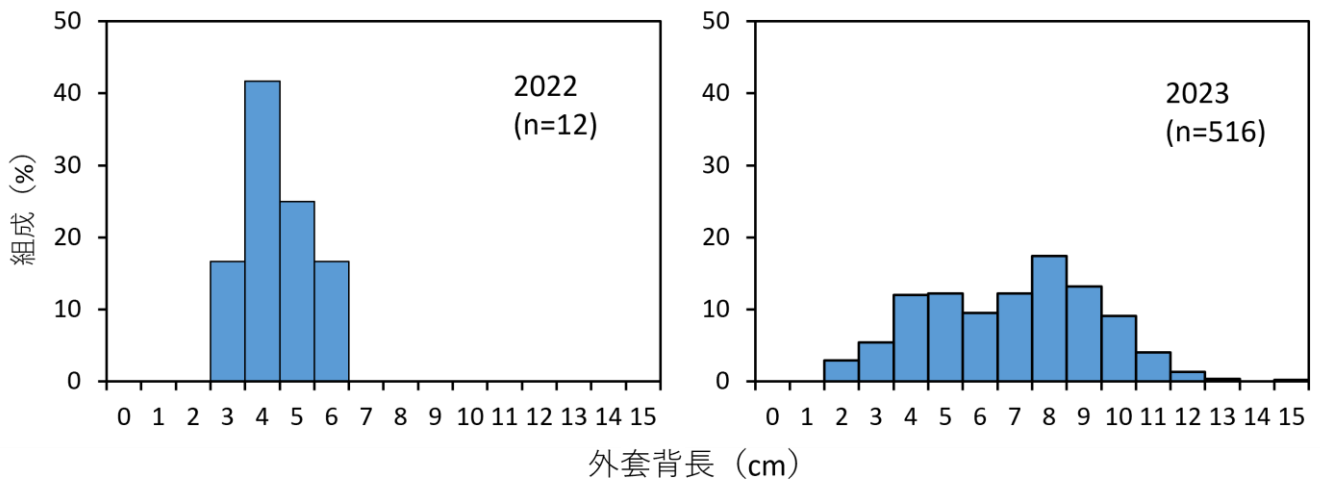


図7. 2022年、2023年6月下旬～7月中下旬の三陸～道東沖合域における表層トロールネット調査で採集されたスルメイカの外套背長組成

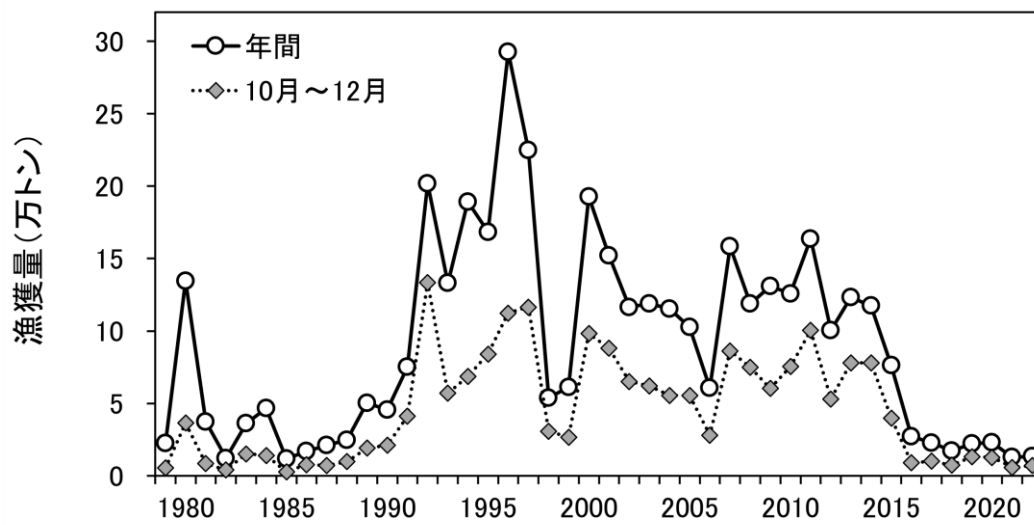


図8. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの年間漁獲量（暦年集計）と10月～12月の累計漁獲量の推移

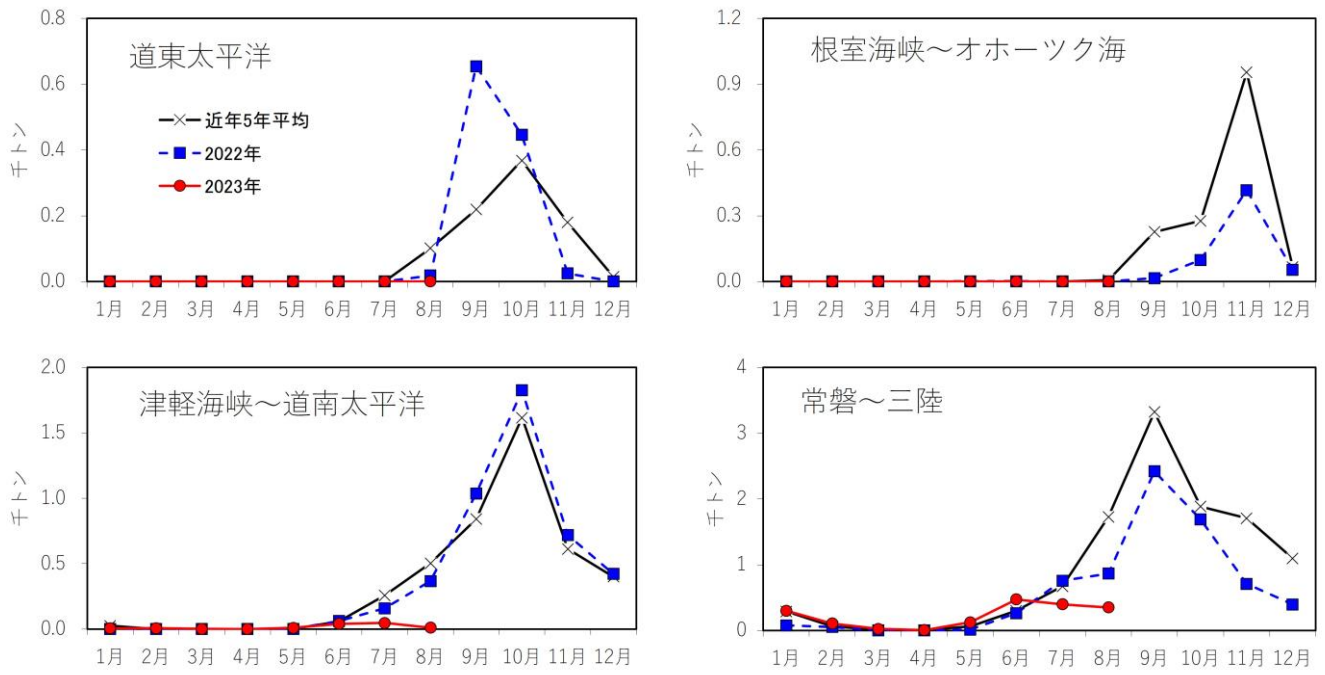


図9. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2018年～2022年の平均
 （いか釣り・底びき網・定置網・まき網・刺し網）

表1. 漁況経過（2023年7月～8月、一部9月・未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	太平洋側での初水揚げ日は9月7日（釧路港、底びき網）で、前年（花咲港で8月12日、釣り）より遅かった。 羅臼港では9月13日に釣りによる初水揚げ日があり、前年（9月22日、釣り）より早かった。 オホーツクでの底びき網による7月の水揚量は18kgであった（前年は1kg）
北海道 道南	函館港での釣りによる8月の水揚量は7トンで前年比22%、CPUEは前年比37%であった。9月上旬のCPUEは前年を下回った。 浦河港では9月19日に釣りによる初水揚げがあり、前年（8月29日、釣り）より遅かった。 苫小牧では9月15日に釣りによる初水揚げがあり、前年（9月5日、釣り）より遅かった。 南茅部での定置による7月の水揚量は45トンで前年比92%であった。
青森	大畑港での釣りによる8月の水揚量は1.7トンで前年比14%、CPUEは前年比32%であった。9月上旬のCPUEは前年を下回った。 白糠港での釣りによる8月の水揚量は58トンで前年比54%、CPUEは前年比59%であった。9月上旬のCPUEは前年を下回った。 八戸港での釣りによる8月の水揚量は77トンで前年比32%、CPUEは前年比50%であった。9月上旬のCPUEは前年を上回った。 八戸港でのまき網による8月の水揚量は0トンで前年比0%であった（前年は90トン）。9月上旬の水揚量は0トンであった（前年は0トン）。 八戸市水産事務所の水揚げ概況によると、八戸港での底びき網による9月上中旬の水揚量は1113トン（前年は731トン）であった。
岩手	岩手県主要港での釣りによる8月の水揚量は20トンで前年比29%、CPUEは前年比41%であった。定置網による8月の水揚量は17トンで前年比41%であった。また、9月上旬の定置網による水揚量は前年比97%であった。また、いわて大漁ナビの市況データによると、9月上中旬の底びき網の水揚量は743トン（前年は345トン）、釣りによる水揚量は144トン（前年は16トン）であった。
宮城	宮城県主要港での釣りによる8月の水揚量は0.6トンで前年比31%、CPUEは前年比37%であった。定置網による8月の水揚量は2.1トンで前年比319%であった。底びき網による8月の水揚量は28トンで前年比399%であった。石巻港での底びき網による9月上旬の水揚量は前年を上回った。また、みやぎ水産NAVIの水揚げデータによると、9月上中旬の石巻港への底びき網による水揚量は490トンであった（前年は141トン）。
福島	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
茨城	7月～8月は底びき網漁業の禁漁期間である。
千葉	主要港での釣りによる8月の水揚げはなかった。定置網による8月の水揚げは506kgで前年比48%であった。
神奈川	間口港における釣りによる8月の水揚げは449kgで前年比227%であった。
静岡	仁科港での釣りによる8月の水揚量は142kgで前年比161%、CPUEは前年比92%であった。
三重	奈屋浦港でのまき網による8月の水揚量は5kgであった（前年は165kg）。
和歌山	すさみ港での釣りによる8月の水揚量は2トンで前年比37%であった。
高知	主要2港への定置網による8月の水揚げはなかった（前年は8kg）。

注：CPUEは1日1隻当たり水揚量

参 画 機 関

<p>地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場</p> <p>地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所</p> <p>岩手県水産技術センター</p> <p>宮城県水産技術総合センター</p> <p>福島県水産資源研究所</p> <p>茨城県水産試験場</p> <p>千葉県水産総合研究センター</p> <p>神奈川県水産技術センター</p> <p>静岡県水産・海洋技術研究所</p>	<p>三重県水産研究所</p> <p>和歌山県水産試験場</p> <p>高知県水産試験場</p> <p>一般社団法人 漁業情報サービスセンター</p> <p>(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所</p>
---	---